新編水滸畫傳 六編 十

へ21
875
60

門へ 21
業 875
巻 60

明治二六年 十一月十日 購求

新編水滸畫傳卷之六拾

東武　高井蘭山翁　譯編

○梁山泊ふ雙の頭を献ぶ

吉後に劉太公ぐ家の門前ふ。十ヒ五羅のうを待しめ。宋江朱進へ
ちや後堂に招ぐ〜うべ。李逵ハ斧と提て傍に扣へし処に。劉太公
已ふ後堂ふ招ぐ。宋江朱進を良久〜打話ぐ前日まうふ
宋江ハ此人ふあらずと云られべ。宋江則ち李逵に對し。汝太公ぐ
言を聞くるや。李逵ぐ云汝晴ふ太公を白眼しも人太公怪れて彩
あそ云ぐ〜ん宋公明ぐいく〜汝まぐ信ぜずんべ。家内の男女を
呼ぶ〜て見せもよ。李逵ぐいく〜勿論のことありて。急ぐ家
内を人も剥さべ呼ぶ〜。宋江と見せもやるに法人一段に成つて

云々。赤日の宋江は武人よりも面色白くして。身材高く。風儀大ふ閑じゝ。武時宋江劉太公ふ對して云。我は是梁山泊の宋江。武人は則紫進あり。汝が女児を奪ひ去れり。宋江は我名と偽くる俗宋江あらん。汝人と為よ。為消息あらべ。お迷系山塔り徑をすぐし。我肯て汝が為に宜しく行ひ得べし。劉太公主と聞て恭しく洋酒を宋江又李逵ふ對して云々。我は是山塔ふ為ふ待べき間。汝は慈主と共ふ後より来て。遠に劉太公が家を去む。再び人ると偽して山塔に駆りる。慈主李逵に對して云々。足下已に宋君を把して。罪を為りまひしかば。今更これといへども主と為し。李逵が云我者ふ縁を求して。侍事と為られ我已に他人と交しかる上は。一命服をぐし。我自ら首と刎

ねして。宋江明ふ献ぜんふ。汝我首と山塔ふ携へ来て慈主を聞く云々。足下今日自殺しまんして。太ぶく残会あり。我一つの計と授けん。須くこれを行ひ人。李逵問て云汝何らの計あるや。慈主云々。足下自ら索と掛つ。忠義堂の前ふ縛を罪と偽て。急ぎ宋先四日の情と思ひ出して。殺害を免しまへてあらん。李逵が云武事如可あらんども。彼人ふ知らまんも孤うしてれば。あらじ自らそと刎て奥ふ死せん。慈主云山塔の法師ふ為ひ骨肉の親ふあらずといへども。縁皆義と結びしを宋あり。何人か敢て足下を咲ちんや。必ず縁つゝ悲命の死と為しまへ。まの豪傑は一命と為ゝ全つし忠義と為すと。以て教ゝ李逵に言と聞て遠に縁ふ山塔ふ帰る。宋江は法師と

忠義堂ふ立ちて李逵がことを取沙汰して居るる処ふ。李逵已ふ忠義堂の前ふ到つて跪き只管を低て默しをる。宋江是を見て打笑ひ。汝ぐづ〳〵家を掛つて来るん却て孔を脱さんん計あらん。我何ぞ怪しく汝と免さんや。李逵聞そして云るるん。糸ゞ罪ひくべく数十棒痛く打しめひて怒りを休めゑ。宋江ゞ云汝先ふ所と与へんと約束しるるに今ゑ痛く打ると云へ如何。李逵ゞ云く。宋先ふ死して免しるんどんば速に我孔を刎ゑ。我又ま点も恨ふ所なし。此時彼孔再三再ひ李逵に謝して罪を綴しれば。宋江ゞ云く。李逵の一彼假宋江を投へて。如児と劉太公ふ還さんば我肯て罪を免べし。李逵確起て云るへ。彼假宋江を投へんと恰も囊を探て如とるんゞ。何の弱きことをいん。宋江ゞ云彼へ一人恐しくん猥あらん再び惑と添て。汝と助けしるん遂まと

聞て大ふ怒び。糸石オうとしゑども。李逵ふ強べしして。彼て短棒を振く。粉米を細く李逵と共ふ宋江を縛して。直に劉太公が家ふ到る。宋公明ゞ作せる次第を一〳〵詳ふ劉太公ふ聞しめ假宋江ゞ風俗探探。事の起りを仮細ふ問るれば。劉太公云て云。彼假宋江ゞ為貌ハ。まの宋江ようも面白うして才材る。又彼後生ハ年の〳〵け六尺ばかり。ゑして丹眼ゑ。此ゑ人三日以前ふ我家に到る。天ふ背つ〳〵ゑを移ゑを移る。然ふ忠義の士ことゑるゑ。如児を棄ん。愛ふぐも思ハば。油断ゑ。彼假宋江晴に女児と棄て。逃去ひぬ。李逵ゞ云我ら為人宋公明の号令を奉て今彼假宋江を投へんと欲ゞ此辺に行て。陰山荒野の人煙ゑ所ゑを捜。彼を求んとて。遂に劉太公が家を出て方々捜しるれども。此日さるに。

消耗あるゝして。翌日も又消息あるゝ。李逵大ふ焦燥て。一連に
數日東西を尋しゝ共。遂て其所を知ゝず。此日李逵遠き茅屋
ゝ行くして。一ツの古廟の内ふ影ゝ良久しゝ南後して立ち廻ふ廊下
ふ人の足音しゝ聞れば。李逵暗ふ廟門を開きあるとゝに一人の大
漢子手に刀を提げ。器の上に登り行。李逵ん中ふ見を怪ゝ紛ち
後ふ隠ゝ孤ゝ廻ふ遠き也ほゝ弓箭を取て立ち出。李逵
對して云ゝるハ。李公先追ふとあれ我自ら而なあるとて。急迫く
孤て彼漢子を捉ゝ。紙捲て漂ど殺ちゝ。彼男が腿
の上ふ中り。遂ふ地上ふ射倒しゝ。李逵急ぎゝ跳来る。彼漢子
を捉ゝ。再び廟中ふ回りて大ひふ責て云ゝるハ。汝深城いうんど劉太公
が女児を奪ひゝるや。其命惜くば直ふ白状せよ。彼漢子が云劉太公

が女児がゝ。我ゝ共ゝ。其ハ只此在中ふ徘徊して探人
と剥取小絨あるゝ人を奪ふ。洪大の而なゝ。何ぞかくの
ごゝ事とあるんや。李逵益明ゝ云汝等実情を云ずんば。多ち
所を打碎んと。二ツの斧を揮ひゝれば。彼漢子大ひふ驚き云ゝるハ。
其人の豪傑先生と知ゝ。遂ふ有あり。慈悲ゝ云我肯て汝
と知ゝん。汝ゝ此事を知ゝ速ふ去とゝ。我遅疑せば。
即時ふ首を刎ん。哀ど偽ゝ云ゝ。我猥ゝ推
殺ゝ。ふ劉太公が女児を奪ひゝ。後ハ刎此を迎ふあゝん。此所
より西小の方ふ当ゝ牛吼山と云山あり。山の上ふハ道院あゝて数箇
の乞士接ゝ。此比強盗来ゝ。乞士らを殺害し。擅ふ道院を奪
ゝ。内ふ居住ゝ。一人が名ハ王沢。一人が名ハ董海と。此迫き比又六七人の

李逵自縛して
宋江明水罪と謝を

李逵燕青
二賊を斬
劉家の女を救ふ

小賊来てわ従ひ専ら往来の強人を恐をのゝあらぶる事ゝ不ゝ可て。民家を劫人彼王江作つゝ梁山泊の宋江と唱へ侍る者人ふ猛威を揮て。勢ひ盛んあり。馮ゝ山王江ぞ不ふゝ割太公ら女児を奪ひしあらん。彼牛沢山ふ就て弱き人。此所より彼山へハ二十里ふ足ざる所あり。燕青云ふ。汝ぞ云処頗る来歴ある。汝ふ我らあ人ぞ姓名を知らしむべし。彼人ハ是梁山泊の沢沢黒旋風李逵我ハ浩子燕青あり。汝矢疵を貼理しゝ者ゝを尋きて牛沢山に行べし。彼男ぞ云ふ系と先しまらぐ。取ゝ尋き来らせん。此時李逵燕青彼漢子ふ伝つゝ牛沢山へ就沢湖ゝ十七八里ふ到つゝ。彼山を見て其形ち果して牛沢のごゝし。二人并ゝ山上に登つて。頂を見ふ。彼ふ一間の瓦院あり。李逵晴に燕青ふ對して云。我足下と共ふ門内ふ

入ゝ。動静を伺ふべし。燕青ぞ云暁を得て事を行ん。先皆ゝ扣へあ。李逵ぞ云我いんぞ然天明を待んやゝて。門を打破つゝ跳入んと世処ふ内より一人の漢子走りあゝ大ひふ怒り。汝何者あれぞ自来ゝ死と求るやゝて。刀を揮て李逵ふ切て来る。李逵ふ切て来ることわ迅く戦ひ二三合ふもあらざる処ふ燕青棒を揮して砲来る。彼楽内走る男ぞ此ふ見て大ひふ怪を再び禁ふ逃去る。燕青棒を振ゝ李逵を助け。彼漢子ぞ肩間を打しゝ彼男多ち地上ふ倒れ。李逵斧を拳て既を砍殺て人やあるゝ待れた。更ふ一個の人もあらゝ燕青ぞ云此内の男女馮ゝ後門より逃出んとも有べれば。家ハ。後門の辺ふ出ん。李逵前門を守り人て走ふ後の辺ふ就て皆ゝ待居る処ふ。一人の大漢子後門を開き己ふ走り

みんとせし時。遠まき指を四〜打て蒐うしろべ。彼大漢子もぐ幌て高に花門を呂んで逃るに。李逵斧を廻して又仕漢子と戦例し。遂に首を刎ふろう。遠まきあまとうて。いぐ門内ふ欠へんして。李逵と共ふ猛威と振て院の内ふ跑入しうべ。七八人の小賊ども幌忙逃ちんとせしうども。李逵ふ呂〜敷それる。遠まき庄門の内ふ入て搜し見るに。果して一人の女房の内に驚き立。遠まき問て云汝は劉太公が女児ふそはあるずや。彼女答て我は劉太公が女なるべ。不幸ふして一人の賊ふ奪へれ竟ふ仕処ふ知らず。毎日流涙するのみ。那〜の打軍我一命と救ひ給へ。遠まが云我ら毒人汝を救ふんとも。仕ふまで弱ふ来りしぞ。必ず怖るゝことあるれとて。李逵と共ふ女児を引て牛吹山とかう。再び劉太公が館ふかうしうべ。劉太公女児を見て

驚び斜ふ走べ。多ち地上ふ跪て。李逵遠まを拜謝ふ遠まが云ふ女児を救ひしぞ。如何して宋江明の力あり。汝山陳ふ来りて宋江明に謝すべしとて。即日李逵遠まを遂に劉太公と引て梁山泊ふ行く。途宋江ふ宋江ふ二ッのそと。宋江ふ歓じて。始終洋ふ行くしうべ。宋江ふ驚び。劉太公ふ遇るふ。劉太公ハ多く礼物を具へて宋江ふ献じれども。宋江ふ受して見と強び辞るに答て。深く懇願を加へしうば。劉太公ふ感激して。遂ふ彩宅ふ回りて。梁山泊ふ行れとうし知ふ。一日山下ふ一駅の人と活捕て山陳ふ引せしうべ。宋江仕者ふ。とうに呂高の人ふ縛れて身の丈七尺伴ある大漢ふ。宋江問て云汝ハ何人ぞ。何ふ見て者ぞ。彼大漢ふ答て云。我ハ皆風翔府の

泰安州ニ就く者共あり。今月廿八日ハ天齊聖帝の誕生日ニつき。毎年彼處ニ武藝の比試あるゆへ。系らも連年彼地ニ弛て武藝を試ひ。ゝゝ地に去年始めて泰安府より相撲の達人。任原といふ豪傑来り。衆多の人を場例し。自ら拳天柱と号して。天下を双と称し。今年も已に四くに檄を達く。天下の豪傑を招く由。系らも一ツハ聖帝廟とあやんが為。二ツハ彼任原に従つて武藝をも学ぶんが為。今年も又泰安州に上り。彼任原ハ身の丈一丈餘ありふして。力量ハ限なし。是ニ依て天下の豪傑。彼が門生となる。然ハ大豆来ゝが命を撓しまひて。泰安州ニ赴き。宋江君を聞て。ぐ憐を。早速免して一命を助けしゝべし。漢子も再三然そして宋江ニ謝し。別て麟ニ下て泰安州へと弛行ける。当時恵まゝ進くあり。

云ゝるハ系幼き時より。盧員外ニ従つて相撲を学び。遍く天下ニ對し。敵なしと。彼任原聖帝廟ニ於て相撲を催し。天下の豪傑を招て。わがとすると。ぐ以ゝ傳ゝ人あり。今月廿八日もまや近くれば。系只一人泰安州ニ弛て。任原とお撲を会せ。彼と一場ニ場例し。名を揚ニ現ら。再び山陣に回る。伏て宋江君数日の暇を賜ゝべし。宋江ぐ云彼任原ハ身の長一丈餘ありて。力量あるゝ。同ぐいうんぞ彼を對手ニ勝ることを得んや。恵まゝぐ云拳相撲の利ハ智にあり。力にあらず。彼ゝゝひ千百万の武力あるゝと云ども系がお撲ニハよもあらじ。盧俊義ぐ云我ハ恵まゝへ幼き時ゝり相撲を学び。ゝ撲を好む。宋江君自ら往んと欲ぐ。宋江君を。ゝ人往べきも自ら泰安州ニ赴き。若何らの事ありて。宋江君を助べし。宋江

什言を聞く。再び遠まを問ふに、汝已ふを去りて往んと欲ふ
我汝が服を許さんに、只多くば何日の日発足さるべきや。遠まが云へらく
八三月十四日あれば。明日発足せし。二十六日ふ卯の時七日ふ委細勿論
と例ひて。ガ八日あれば撲を合さるべし。宋江を聞て強うて留じ。その
歌ハ前段歌ふ

○遠まを智とめつ〳〵鑾天挂を撲

扨も翌日遠まを山東の商人ふ化して。一荷の雑貨擔を荷ひ。ふ中
鼓を拍つ。山陰の門徒とつひしてべ。結伴外出と聞て。一度に吐と
笑ひ。什日遠まを遠に法服ふ別れ。山陰を打て。直に泰安州
と走て急ぎ行に。紅日西に傾しべ。蔥青孤宿を求んと欲し。
村中ふ入んとせし処ふ。背後ふ人あつて。遠まを暫く待つべしと呼ばれば

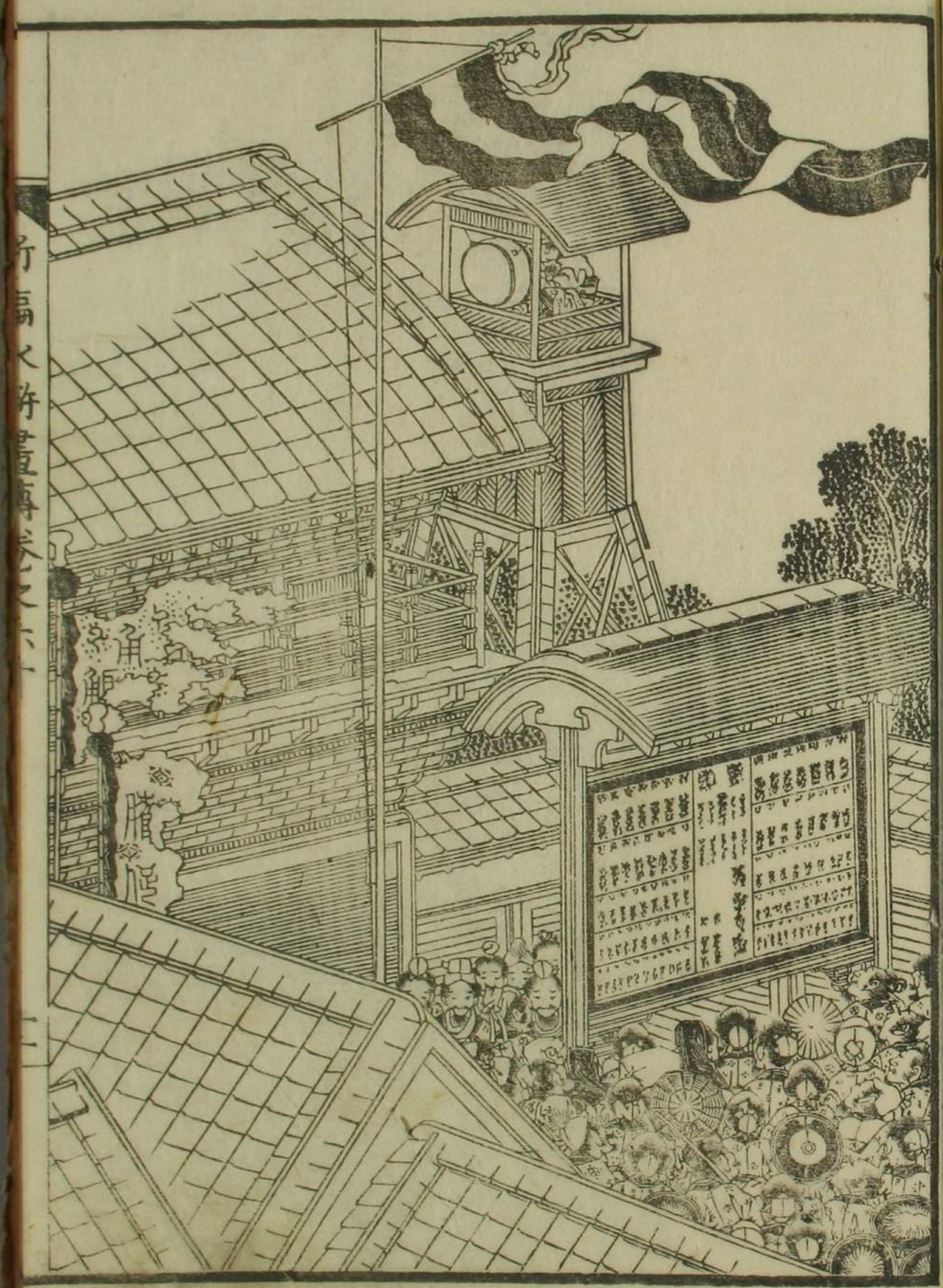
遠まを急に振て回して什人を見れば。黒旋風李逵あり。遠まを向て云へ。
李公我を慕つて来りしふ。李逵ぐ云。汝前日我ふ伴して
荊門法ふ来りぬるふ。今什回何ぞ又汝ふ伴せざるんや。什史宋江
ふも候らぬ。暗ふ山陰と下つて孤来りぬ。遠まを云我彼地ふ行うや。
却て汝と伴ひぐし。足下早々回りて。李逵焦燥て云汝ハ得
豪傑ふ。人孔力ハ頼む値ぐれども。我一點の好ふとして汝我
助んと欲するに汝いんぞ来と回さんと。遠莫我ハ汝ふ伴て
孤行んに何の不可あるとあらん。遠まを中に思ひるハ。我
再三見と嫌ふ必定義気を壞ふてあるべし。曲て彼を伴うと図り。
則ちき〳〵李逵ふ対して云へらく。聖帝の廟日へ四方より大勢行人
聚つて。千闐熱あるべく易者あるべ。四〳〵ハ足下を識留る者やあらん

に足下なら我が三件あるにちがひなば我敢て汝と同往せん李逵が云
我易く三件に随はん。汝先これを示しね。燕青が云第一にハ路中にあいて
我と汝と前後にわかれ路を行。旅宿に至りなバ必ず外に出ることなかれ。
第二にハ廟門の前にて宿を借りなバ汝ハ只虚病を構へ面を包みて臥りて
声を出さずしてあられ。第三ハ相撲を見物しける時必ず騒ぎたつることなくて
あられ。足下なら此三件を守りなバ肯て伴ひまゐらせん。李逵哈々と打咲ひ
さまで術のこと何ぞ難きとするに足らん。我堅く守るべし。汝心を安んじ
まへとて両人已に宿を借て休息し。翌日未明に打立て。李逵ハ前に
たち燕青ハ後より従ひ聖帝廟をさして行けるに。此時来客の貴賤
恰も蟻のごとく群つゝ路に連れり。燕青ひそかに廟門の前に至りし処に若干の人
相撲場を圍んで額を作りたる。燕青も雑貨擔を傍に卸して額を見

に泰安の相撲擎天柱任原と書附。其側に二行の文字あり。拳打南山
猛虎脚踢北海蒼龍と云十二字あり。燕青これを見て冷笑ひ我此額を
踢破つて棄んものと牙咬をなしけれバ。傍人これを聞て大ひに驚き。かの
漢子ハ定めし相撲の達人ならんとて。頻りに任原に告にけり。毎
年三月廿八日ハ聖帝の誕生日にて。遠近の男女来詣彩しく。諸商人此店
へ参ることを知るべければ。客店ハ総て一千五百間あまり来詣の人充満して。
咫尺の地もあまさざりけり。李逵早く燕青を迎へ共に旅宿を求め暫く休
息して居たる処に忽ち門前大ひに騒がしく二三十人の大漢子店の内に
進み入今年の相撲の對手ハ此旅店に来て宿りたるが。果して此人ありやと
問ければ。店主答て我店の内にハ斯のごとき人あらず。恐らくハ門差ひ
なるべし。彼漢子ども云。諸人挙て此店の内に入りたると云しに汝なんぞ

偖々や。と云。我宿の内に。客人の漢子宿を借られた。一人は病ふ苦で
却て。と。叶ば。又一人は山東の商人ふく六尺ふ足ぬ小漢子あり。
彼いらんぞお撲を能せんや。彼二三十人の漢子等ぐ云汝先に山東の
商人と引て我等に遇しめよ。と云足下ら房間の内を見よ。蒲の
下に打外る客人の衣則一人は商人。一人は病人あり。彼漢子衣を浅
見て。かゝふ小漢子いらんぞよく〳〵お撲と會せんやと。流皆怪る処
に。内一人ぐ云るゝ。彼已に類を踢破つ〳〵きんと。恐ろしる者あるべ。
必定第宋の事にあらじ。彼病人と云は是又人ふ図らまんとを恐れ
虚病を搖るに疑ひあり。結人是を聞て実と同じ。明後日お撲と
云て。実否を知べし〳〵と。処に。又三四十人の漢子進入
て口々ふ問れ。と返ふ俺と。李逵面を赤て李逵青ふ

進めるに。李逵面を包し給と。〳〵と李逵ぐ相貌を見く
大ひふ驚き。お撲を交へ。豪傑に。必段は岩あらんと云るる。惡き行
吹ひ。此人は病を搖て進退不自由あるふいらんぞよく〳〵相撲と交へんや。
我別段て力あ〳〵いなぐ。任系ぐ對ふ撲を合せんと欲に。お笑て
云。客戯と云るふとあれ。任系は一丈餘の大漢子あり。李逵は三尺ふ満
ざる小漢子あるに豈對ふあらんや。惡きぐ云汝必ず我と搦子
べ〳〵お撲の利は唯智ふ在の。何ぞ必ず〳〵も身材の大ふと論ぜんや。
我明後日任系ふ贏て。〳〵く法人の癡笑と交ふも見とらふべし。
問く。まぐ人命に信ぜば。客嚢美と降るんとは猶定め難し〳〵ぞ。
〳〵る。三日惡き早天ふ起く。飯と用ひ則李逵ふ對て云るゝん。足下ら
病未ぐ快〳〵ざるに。皆く門外ふ出て。巻牛〳〵と。已に系ふ解


角紙
腰紙

燕青雜貨高と扮て泰安州角紙場ふ到
金色紅葉品
屋縣縣金錦

跟行なり。任原が弟子凡二三百人むらがつて任原に随つて旅宿に立よれバ
燕青これに任原が宿に忍入て。任原を見られたく床几に坐して。威風凛々
相貌堂々たり。弟子の内に燕青を見とる者なく。任原に列と告ぐる
に。任原数声高く物に呼ばらく云今年ハ死を招く族我お手にかゝらんと
欲するハ誠に笑止のことなりと燕青を白眼て云たれバ燕青忽にこれを
俟て。外面に出たり。任原が弟子ども燕青を見て大ひに笑ひ。彼がやうき
小漢子。何ぞ対手になるべくもあらんやとて先ず嘲りたり。燕青再び
旅宿に回りしが李逵大ひに屈して云我昨日虚病をなして打臥
ん極めて鬱悶し。実に病となりしと。燕青が云只今宵一夜を忍び
給へ。明日ハ我お撲を合せて勝負を決せんとて。其夜ハ先ず歇たり。已
二更の前後に到りしに。聖帝廟の鼓楽の響大に起りて鬧熱あるすく

尋常ならバ二更の一点に李逵燕青はじめて起て用意を調へ則ち
対して云けるは。今日お撲に勝て早々回らん。主楽んで待玉へ。此夜
旅店を借りて一宿しける参詣の人。約莫二三十人ありけるが燕青が
かく云を聞て席皆ん申に冷笑ひ却て燕青を諫めて云けるハ。彼任原
ハ天下無双のお撲なるに。足下かくのごとき身材なくて對手に
なりなバ。必定命を失ひ。様くハ身を傷ひ。眼前に禍ひ到るべし。
足下自ら見を思ひし今日の相撲を罷休なりなバ。身全からん。
燕青嘲つて云我お撲ハ如きよりなまび得て。手法手術奇妙なり。
今日我彼を倒し相撲に勝らん時。利物礼物悉く見を奪ひ人間
中く皆同宿の情を顧て共に力を併せんことをはじらして。利物礼
物を棄玉へ。任原いろ往年材なく。萬人の力ありとも。我眼中肥太たる

蛾のごとく。孫人あるを聞き給ふ。怪しみ給ひ。史進に問ひ給ふ。
史進申さく云我二ツの斧を携へ可参らんや。遠き方云不可参
人あつく疑ひ惑ひ速に参るべし。只者の雅みて来りあるて。志人遠き
孫宿とおもひ撲場に参り。延ふ見物の衆群集して。色遠き茂
抜ぎ。彼援生して撲の對手あれと口々に呼ばりける。遠き棚の上と
見るに。利抜の金紗礼抜め錦繡堆く積上勝方にあるを送る。榜の上
ふ書て。棚の前ふ建る。宋朝みは蓋の上ふ撲を交しもるの例あるる
ゞ果して。蓋と設け。天井ふ幕を蓋ひ。幕の内ふは金銷の天蓋を
吊。四隅の柱ハ金紗を用ひて包まぬ。毛布の幾言培ふ弓すべらべ太守と
始として。大小の孫役人坐て撲場ふ坐して見物を。時ふ一人の部署蓋の
上に立て先後で祥明とおもふ。羽扇を挙て東西と招き今年ハ

撲早くあり人と呼ばるる。処ふ彼任系幼く二三十人の弟子と引て
蓋の上に揚り部署ふ對して何やらん云るゞ。部署又羽扇を挙て。
色ふ呼ばるる云るゞ。抑此任系といふ人。去年幼て高社ふ於て撲
の頭等を取る。人ふ勝名を遠近ふ振ひ。今年も又弟子の弟子と
引て高社ふ到り對手と擇ぶて。撲を合せんと欲に。誰ふても呼
ある人あるべ速ふ。撲を約ある人とまぐ云も呼らざるに。任系
も又自らとて大きな色ふ呼ばるるは。我多年囲くを廻て撲
と交へしるも。我ふ勝者まぐ一人もあらば。去年幼や高社ふ於
好き撲を数十人と例して利抜と取る。今年も我来つ頭等
を取に。多く多と思ふ人あるべ。性く一撲る試ん人あるべ百番
内ふ険ふも輸ある。棚の上に利抜とれと流るべし。彼ふ我拾ふて

諸人の目を醒しやうん。我對手にあらんと思ふ人の数を尽してみる
へ。我毛ひも惜ずして。ぱらと白眼て立つゝうべ。彼見物人一度ふどつと
唱和ス。此時逸まち蓋の上ふ跳上り来不絶こうとゝいくども。既等
お撲の對手ふあらんと呼うゝわべ。郡署逸まちとゝて攻ひ彼ハ
何國の人ぞ。姓名いかんと問ふ。逸まち答ていく云。我ハ山東の商人
李乙と申者なり。我只諸見物のみふお撲を合せず。一覧ふ供へべし。
郡署云是下弓既筭お撲と合せんぐ一命を失ひんも料ぐし。
初ゝず慥の保人あらや。逸まち云。大丈夫のお撲と交へんふ何ぞ
必しも保人を用いんや。彼人を用ひんや。彼人を用ひんとお撲の上ふて。死生を論ずとゝふ
旧例あり。汝いうんぞ是を惜ゝくや。郡署が云已ふ此のごゝくべ。是下
先衣服を脱ゝ来らん。逸まち是を聞て。早速衣服を除きゝ変り

諸人ゝ逸まち牙内ふ先を刺しゝると看て。大ひふ驚ゝ。牛人交へて
笠原の人ふあらじとて。感歎しゝる。任原ハ神ふ逸まちと一次
ひ呑で落ゝるぐ。今牙内の刺と見て。つゝ逸まちゝあるべあらんと
思ひ。頭る心中ふ喧れゝる。大守ハ機会の内より。逸まちが先の刺と見ゝ。
了得の者あらんと推ゝ。列機会の前ふ呼て問ふ。汝ぶ故ハ何
の志あるぞ。又姓名ハ何と号ぞ。逸まち答て云。我ハ山東莱州の者ふて。
名を李乙と号ス。彼任原天下の人れお撲を搦むと同じゝ人系彼とお撲を
合せんと欲ゝ。今年初めゝ南北ふ系流ひ。大守が云彼利物礼物ハ非ゝ
多ぶ也ゝ。ハ我よのれと二ツふ分て汝と任原とん煮むべし。汝お撲を罷休
て我ふ車んや。彼ゝ我汝を機業ゝ用ひべし。逸まち是を例して云。
相公の好意感激ふ堪ず。然ども只任原を陽例ゝ。名を天ちに

ゝ為らんと欲ス。伏して願くハ相公ハ家ガ兄を降し給へ大守ガ云任系ハ力量千人ニ勝レ。お撲の達人なれハ汝いかんぞよく彼と例さんや。遂ニ家ガ云系從ひ滑ガ業に性命を傷ちてもなほ恐あり。只お撲と合せて勝負いと定まらべし。都暑ガ云汝死を求んとすも宜しく利物を分ちて相公の令に從ひ給へ。久しくして互ニ敵と道べきなり何ゆへ只顧弱を以て強に敵せんと欲し。自ら事と為つや。遂ニ家ガ云足下都暑とも勉る勿れ。お撲の利害と爰へ為ハざるや。身材の大小力の多寡。弁の肥瘦。只多の強系と云く。勝負を論ずべからず。お撲の実利ハ者と思とのミ。我又ハ能くして。お撲と合せんと欲べきや。相撲扎湖ニ於てハ。非変を測の乃を学び得て。今日の競筭で死者一時ニ十人来る。片腕ニも足ずと思ふ処あわれ。特に此処ニ来ル。お撲と

合せんと乞。大言ハ差あり。今に勝負と為て。我言を考合せ給へ。遂ニ家ガ云ハ然ら〻を聞て。遂に大守の前を退き。麾のよ下登り〻ぶ。数万の者ハ渋魚鱗のごと〻立並んで。肩を接背として見物す。此時任系ハ暗ニ拳を捏り只一場ニ場数。天下の豪傑ニ勝を決せんと為う。早速麾の上ニ躍り出れば。遂青も同じく躍り出る。両人お撲して互ひ〻処ニ羽扇を入れ人ニ為て云ふ〻と為ふんと為る〻合せる人。必ず得ることあり。れて。沙を掛羽扇を引れば。両人一度ニ為て。一往一来秘術を尽して精合する。遂青ハ本来性き達人なれば。武ハ有りの眼を殺う。武ハ右の拳を挙う。只々先を以て對しれば。任系焦躁て。只一推ニ推倒さんと為れた。遂青を撲ふ。後ニ接前ニ迫つく。良久く勝負ならざる。迅ニ任系測り難て。自己ハ乱れ出て

邀まゐらせ又千住し。高に御入給へと云ふ門の法を設く。了得の大漢子と眼よりうるく指差。大ふ却て屋の下ふ擲撲るふ。任系ハ牙を齧し。ふ例ふ成ふ久しく時数百の又鬼人一同ふ咄と高声ふ喝采しかど其響き天地ふ震ひて。山川も寂るゝ如くなり。任系ぶ来ふたる只彼利起礼物ふんを掛てあり。任系が輸くるとて。二三十人舞〳〵跳出棚の上ある利物を爭ひ取て。竪に拽撲ふ掩て大ふ笑ひ乱れ大守も是を禁ずるを能はざるして。狂頻りに強勢しるる延に黒旋風李逵。此光景を見て。忽ち怒発して虎の鬚をして。傍に立て。枝の木を拔き。数百人の中ふ打て入下官らぶ内ふ李逵を御覧る者有て。彼あを梁山泊の黒旋風李逵なれ。夫脱するく口く呼りつく。大勢一度ふ跳あり。大守ハ黒旋風ぶ名を聞て。大ふ驚れ慌忙き馬ふ乗くく

州裡へぞ帰りける。任系ハ屋の下ふ投隠れく。打を拔くして居る延ふ。黒旋風枝の打木をもつく。既儀ぢんふ打倒き。悪青と云ふ廚門の外ふ打のぐ。四面八方ふ跑て打ひしらべ。数百の人鬼ふ打く木の葉の如東西ふ散て逃走る。下官ハ個く弓箭を抱つく。弓のごく射蒐る。李逵逃まゐ矢を避く屋の背ふ跑上る。瓦を把て下方へと打る延ふ廚門の前ふ喊の声ふ盧俊義刀を揮く砕く入る次ふ魯智深武松者。史進穆弘解珍。解宝拔て七人の頭一千餘人を引。弓軍器を挙。忽に廚門の内ふ突入く下方へと追ひ打ちく。李逵逃まゐ見と見て。屋の背より跳り。盧俊義らと共ふ力を併せく働く李逵又猛宿ふ回つく。二ツの斧を揮て逐ふ猪将ふ従つく再び屋中ふ打出る。官軍ハ已に大勢を併せて内ふ梁山

熱書相撲小勝て
任原之郷落を

此巻中三丁迄
病床之重也

泊の人馬ハ引取て北回る沙へ出まつ〳〵追蒐しつゝも遠く
隔つゝ〳〵官軍ハ於〳〵也退せば。引回さ。盧俊義ハ法れと引て
二時後〳〵北るゞ李逵一人追ざれば。盧俊義打笑て云。李逵又
禍を引出さんハ疑ひあり。法師の内御ふ〳〵も彼と弱出〳〵て。山陣ふ
伴ひ〳〵。時に穆弘進〳〵出。糸李逵と共連ぬ〳〵。盧俊義ゞ云足下
肯て見と計べ我全く憂あり。宜し〳〵んと為り尋出〳〵へ〳〵て自
ハ法れと引て先梁山泊へ帰ら〳〵う

○李逵寿張縣ふ喬衙に坐る

偖も李逵ハ糸ふ二ッの斧と挽て直に寿張縣ふ到り。知縣ゞ衙門の内
に進み入て。梁山泊の黒旋風李逵あり〳〵と聴て。縣中の人大
ふ驚き慌忙て八方へ逃去ぬ。山寿張縣ハ梁山泊ふ近ら〳〵て。人皆ゞ

旋風ゞ姓名と聞及び。李ふ黒旋風李逵〳〵云五字と称する時ハ小児ども
大に怖れ。夜啼と止ざ〳〵〳〵や。況ふ今日李逵自ら来り〳〵ふ〳〵
ぞ見と怖ざ〳〵んや。山時李逵廳上ふ上り〳〵知縣ゞ坐する持ふの上に
坐し。大喜色ふ成つゝ云准ふ〳〵も。一吾人我弟ふ〳〵〳〵従法せ〳〳〳〳
法〳〳ぞんべ我ゞと為つゝ縣中と煙拂ちん。法人此云と聞て為ゞ恐
為ゞ為る商議して云〳〳ハ。彼ゞ云に背べ必ず禍出来べ〳〳。
出く慇懃ふ接待せんふハ〳〳て。大膽ある者吾人李逵ゞ前に魂を再
二歎〳〳て云〳〳ハ。今日孤ゞ来除と為〳〳ふ〳〳ハ。〳〳法事〳〳〳〳
あらんふ。吱く命じ〳〳人李逵ゞ云我為〳〳て汝ふと犯ふ〳〳ふあら〳〳幸ひ
此辺辺と〳〳〳〳人縣中と遊浪せんゞ〳〳〳〳処に知る〳〳。汝ら早
知縣と為て我ふ遇〳〳よ。我知縣ふ到面して頭用事あり。吾人の〳〳

若て云知縣相公ハ沈沈と見つゝ大ふ驚き後門とおゝ逃去るゝ糸
ゐて李逵を放ぜ。李逵是と聞て今〳〵後ぜず。自ら後堂ふ入り
知縣と見る迎ひ後堂の内ふ知縣ゞ冠衣服ふ改れば李逵是を見
して驚きて急ぎ大声ふ呼つゝ云我今日より知縣と成るぞ
法役人ふ是〳〵来つゝ拜とあせ是一人ふも来らざる者あ〳〵逃
法役ふ係〳〵罪と引ゝべし。法役人あとと第〳〵止ても浮ぜ。是〳〵来〳〵
一同ふ拜と約ひ是れば李逵是ぞ眞ふ入〳〵問る。我ハ粧束と見〳〵る
風俗接張いろん法人丹〳〵差〳〵いて。沈服公服と着〳〵身入る
接張十分ふ和ゝ李逵ハ是と笑て哈〳〵と笑ふ笑ひ汝ら早く法役
人と引て廳糸ふ来れ。我ハ決沈すべ〳〵。是背く者あ〳〵一〳〵首と刎
ゐし禁とせん。法役人ふ告て云沈沈のまうまふとうゝ。法役人等も

法〳〵逃回り。只一人も此ふあらざ。李逵ハ云まうあ〳〵。汝らゞ内者人
假ハ法役人とあつ〳〵我糸ふ對ゝせよ。我戯れふ是非を変沈せん
法役人是を高綱して。者人の牽寺を法役人ふ為せて爭とをゝる
こと消へ〳〵ゐれば李逵者人の法役人を見て汝らハ何ゆへ爭いを
いさ〳〵ゐるやと問る処ふ先一人ゞ云ゐる。彼者痛く糸を打ゆる史
糸被〳〵ゐまを法人ゞ云ゐる那〳〵知縣相公事と公ふ変沈〳〵ゐる人ゞ
一人ゞ云彼〳〵ゐ沈糸と罵り〳〵ゐ人。糸彼者を打ゆ。相公ゐれと是
多人李逵ハ云と問て云ゐる。打ゐるゆへハ豪傑あるべ。者ハ罪あ〳〵。
打ゐる者ハ嬬弱ゐれば。者ハ罪あ〳〵。法役人ふ命じ〳〵打れる
者ふ沈枷と掛ゐ知縣門の辺ふ遣ゐ。是も脱ぶ〳〵て二ッ孔
斧とふ孔ふ挽擅ふ衙門の外ふ立ゐれば法の武あとと見て笑ゐ一喝

と呼ばるゝ。李逵已ふ縣前を馳るゝ処ふ。穆弘わ迎へ入りう云うゝ。
法政府於て足下の見へぐると賞へ。わるふ。足下此処ふ来る。何事とあゝ。
かくのごと装束と云ゝ。早く山庫ふ入りへて。則李逵ぶよ
と勢へ〳〵者人舟〳〵発ぐ〳〵馳四う。已に金沙灘に到りしゝ人
李逵ら粽束と見〳〵名ふ笑ひそう。李逵公服と云ゝてまに斧と持
虎に忠義堂ふ到り。宋江と会〳〵ゝる処に。法政府此雅とゝて。云咄と
咲ひゝう。宋江大ふ罵つ〳〵云汝何ぞかくのごとく天膳あるや。此我も我
ふ知らずと山とわう到る処ふ弦〳〵渦を憑ゆる。此罪ふ孔ふ高れう
向後為人を改めべ。再び彩るを仕ゆ。我等〳〵て免す事じ。李逵
拜伏〳〵て恭〳〵罪を謝〳〵已に忠義堂と退きゝう。梁山泊見ゝう
大ぐ人馬平安ふ〳〵て毎日武義を演〳〵。弓馬と学んで。官軍と防ん為と

のく後〳〵ゝう。扨又泰安州よりう見まで宋江が紫巾ゝ為援の一事
と来〳〵ゝ来系へ進奏ゝ。又多処よりう。表文ともつ〳〵宋江らぶと
と奏〳〵ゝう。ゝ時道君皇帝ハ高に深んで一月ゝう政事を少
あらゝ。此日始て御疾癒れべ。朝廷へ出御あつ〳〵万事を学へ文武
の友人名金階ふ列う皆万紫を奏〳〵ゝう。殿政の官人ゝ声に呼
つ〳〵云今天下の内ふ事あ〳〵。早く天子へ奏聞あれ。ゝのあ〳〵早
く退朝あ見て。毎〳〵の例式あり。進奏のつ〳〵出〳〵奏〳〵ゝく
臣が院署の内ふ多所ゝうの表文を多く牧〳〵ゝう。これ宋江おゝに
ゝと強動〳〵。公孫〳〵て府州ふ到り。庫銀と紛し。民百姓と殺害し
貪厭に〳〵て。足ゝと紛〳〵ず。友軍も多と制すゝて能べと奏せゝう。
ゝ〳〵勦捕とあさざんべ。後〳〵大ひゝる患とあゝ〳〵と言上ゝ。天子

宣く去年正月上元の夜に汴京国を閙せり。今年又各所に行く
孫擒に朕先年より累次樞密院に命じて。許多の友軍をさし向
梁山泊を征伐せしむるも。今に回奏せず。勝敗いかんと宣ひ
御史大夫崔靖進み出奏して云臣久しく聞く。自今梁山泊に一面
の大旗を立て。上に「替天行道」と云字を書うと。汴京民を脅もの
御みして。民の心に服せず。時々に乱を加へべうべし。倘或は虚
に乗じて。遼国の軍馬境を犯さば。如何の軍彼此遮掩がたうべし。
臣が愚考にては。熟々按ずるに。宋江が流人に堕ち山間亡命の賊
みして。名官刑を犯し一身を避るに所なく。よりて衆目山林に遁れ
隠れて嘯聚し。恣に不法を為せり。若一封の丹詔を下し。縁て先緩
まの官人に命じ。御酒珍羞を持しめ。直に梁山泊に差し甜詰
を以て庶人を招撫し。既までの罪過を赦して皮軍となし。以て
馬を乞へ。遼国の敵を防ぎ。豈に為せば。只那くに陛下清
聖慮を廻らし。人を奏し。天子に告げ逐一に図り召き
たまうして。臣即徽猷の大尉官陳宗善を召て勅使となし。丹詔を
美酒を持しめ梁山泊へ赴かしむべし。勅使有る。勅使梁山泊に
到るの日いふる勅書に大ありて。豪傑怒つて杜破し。勅使を罵り
悲哀の経偈に遇しめ。這く冷糸なる次第ようん。七篇目に詳あり

天保九戊戌年初秋發兌

大坂　河内屋茂兵衛
　　河内屋長兵衛
　　勝尾屋六兵衛

江戸　前川彌兵衛
　　角九屋甚助
　　英大助
　　丁子屋平兵衛

書肆

和漢
西洋　書籍賣捌處

群玉堂　河内屋孫兵衛

神奈川県立図書館蔵